日本建築学会大会学術講演梗概集
（東海） 2021 年 9 月

明治後期から大正初期の台湾卑南溪における軌道の建設と土地の開発

正会員　○辻原　万規彦*

台湾日日新報　台湾百年歴史地図　台湾総督府文書
台東製糖　改良糖廓　手押し台車軌道

１．はじめに

筆者は，これまで，戦前期に日本の影響下にあった地域に建設された製糖工場と周辺の地域開発との関係を検討してきた[1)]。そのうち台湾では，青井らとともに西部の濁水溪流域をひとつの構造をもつ領域世界と捉える視角から，清朝統治下から日本統治下へ移行する時期の製糖業と地域の開発との関係を検討した[2), 3)]。また，北東部の宜蘭の蘭陽溪流域を対象として，日本統治期の製糖業や製紙業などの産業による地域開発の枠組みも検討した[4)]。

それらを受けて，本稿では，明治 40 年代から大正初期における台湾南東部の卑南溪の流域（図を参照）を対象とした。検討には，台湾日日新報の新聞記事，中央研究院地理資訊科学研究専題中心が運営する台湾百年歴史地図に収録された各種地図，国史館台湾文献館文献檔案査詢系統で閲覧できる各種の台湾総督府文書，糖業協会所蔵の糖務年報，国立台湾図書館日治時期図書影像系統で閲覧できる日本統治期の各種文献，台東県史（台東県政府編印）などを用いた。台東市周辺のみであるが，2010 年 9 月 18 日，2013 年 10 月 11 日には現地調査も行った。

２．台湾南東部の台東を流れる卑南溪とその周辺の地形

台湾東部には，3000m 級の中央山脈と 1000m 級の海岸山脈に挟まれた幅数 km の平原である花東縦谷が南北に延びる。花東縦谷には北側の花蓮市付近に流下する花蓮溪，海岸山脈を横切る秀姑巒溪，南側の台東市に流下する卑南溪などの河川がある。このうち，台東平野へと流下する卑南溪（上流は新武呂溪とも呼ばれる）と鹿寮溪や鹿野溪などの支流が形成する流域が本稿の対象である。

日本による統治が始まった当初は，台南県が台湾南部の広い範囲を管轄した。明治 30 年には東部全域を管轄する台東庁が設置され，さらに明治 42 年には北側の花蓮港庁と南側の台東庁に分割された。この分割後の台東庁が現在の台東県にあたり，本稿が対象とする範囲である。

３．卑南・花蓮港間の手押し台車軌道の建設

手押し台車軌道は，「軌道」や「軽便鉄道」などとも呼ばれるが，機関車が貨客車を牽引する鉄道ではなく，人力で軌道上の台車を移動させる施設である。日本統治期の台湾各地で建設され，徒歩での物資運搬や移動に比べて，格段に多くの物資を迅速に運ぶことができた。ただし，台風の季節には橋梁の流失などで度々不通になった。

明治 43 年 3 月末までに，台湾総督府民政部によって卑南・里壠間（図を参照）に軌間 610㎜ の手押し台車軌道が敷設された。さらに，台湾総督府鉄道部が民政部の委託を受けて，明治 44 年 3 月までに花蓮港庁側の璞石閣（現在の玉里）まで軌道が敷設され，同年中には卑南海岸から花蓮港庁の鯉魚尾までの 96.5 哩（約 155km）にも及ぶ長大な手押し台車軌道が整備された。ただし，ほぼ同時期に卑南・花蓮港間で機関車が貨客車を牽引する軌間 762㎜ の軽便鉄道の建設が始まり，軽便鉄道が開通した区間の手押し台車軌道は順次撤去された。軽便鉄道による台湾総督府鉄道台東線が全通したのは大正 15 年であった。

４．製糖工場の建設と官有地の売渡・貸渡

台東庁内の手押し台車軌道全線の営業を開始したのは明治 43 年 9 月であった。同年夏に台東庁内に設立された 2 箇所の製糖工場に対して，12 月に原料採取区域が設定された。これらの製糖工場は主に甘蔗の圧搾のみに機械を用いて含蜜糖を製造する「改良糖廓」であった。野田豁通男爵経営の野田製糖場（汽機 40 噸，卑南街所在）と増永三吉ら経営の新郷製糖場（汽機 40 噸，里壠所在）である。「原料採取区域」制度では，特定の区域内で栽培された甘蔗は，区域内の特定の工場に納入する必要があった。

次いで，大正 2 年 1 月に死去した野田の後を受けた安場末喜男爵を中心に，同年 2 月に糖蜜を分離して精製した分蜜糖を製造する新式製糖工場を操業する台東製糖が設立された。台東製糖の原料採取区域は，2 つの「改良糖廓」の原料採取区域をあわせてさらに南側を拡大したものであった。ただし，新しく建設した能力 350 噸の新式製糖工場の操業開始は大正 5 年 1 月であり，それまでは既存の改良糖廓の能力を増強して含蜜糖の製造を継続した。

大正 3 年 12 月に花蓮港港民会に貸し下げられた手押し台車軌道は，大正 5 年度からは台東製糖の専務取締役であった丸田治太郎に貸し下げられた。後に，自社で機関車が貨車を牽引する軽便鉄道を新設するまでは，手押し台車軌道で収穫した甘蔗を工場まで運搬したと考えられる。

大正 4 年には，広い範囲の官有地（図中の緑色の範囲）が台東製糖に貸渡もしくは売渡された。台東製糖は，これらの土地で「内地」からの短期移民による開墾を進めた。さらに，台湾総督府による官営移民村が建設された花蓮港庁内とは異なり，台東製糖自身で私営移民村の建設を進め，「内地人」のほかに「本島人」（主に，台湾在住の漢人）の移民も進めた。これは，卑南溪流域では，

Relationship of Construction of Push Car Railway and Land Development on the Beinan River Basin in Taiwan between Late Meiji Era and Early Taisho Era　TSUJIHARA Makihiko

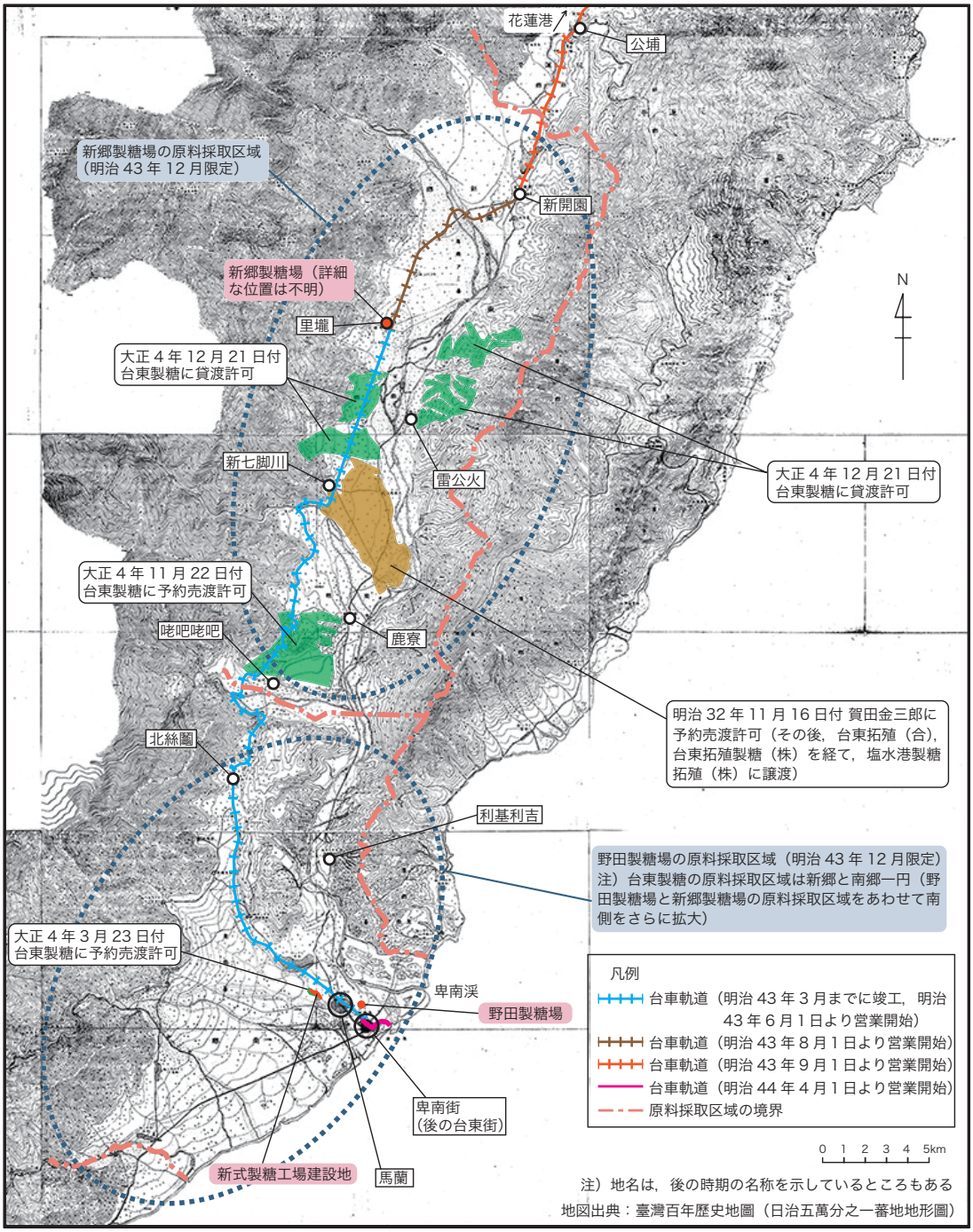

図　明治 43 年頃～大正 5 年頃の卑南渓流域の軌道と土地の開発

当時でも漢人の集落が少ない一方で，台湾原住民族の集落が多く，土地の開墾が十分に進まず，甘蔗の栽培が十分ではなかったためと考えられる。しかし，台東製糖（後には台東開拓）による移民事業は特に初期には十分な成果を挙げることができず，移民の定着度が低かった。

西部の濁水渓流域では，清朝末期には既に漢人集落が形成され，台湾人資本による「改良糖廍」の建設と比較的小規模な原料採取区域の設定によって土地の開墾と甘蔗の栽培が進んだ。その後，複数の「改良糖廍」の原料採取区域を統合して，日本人資本による新式製糖工場を建設することによって，日本統治下での地域開発の枠組みに移行した。しかし，卑南渓流域では，「改良糖廍」の建設が日本人資本によった点，原料採取区域の設定だけでは不十分で官有地の売渡や貸渡を行った点，甘蔗の収集に当初官設であった手押し台車軌道も利用した点などが異なる点である。

5．おわりに

台湾南東部の卑南渓流域における日本統治下での地域開発の枠組みへの移行は，西部の濁水渓流域や北東部の蘭陽渓流域のそれとは異なる過程を辿った。

今後，台湾の他の流域も対象に，清朝末期から日本統治期における地域開発の枠組みの変容を明らかにしたい。

謝辞　本稿は，JSPS 科研費 JP20760430，JP23560769，JP26420647，JP17K06754，JP15H04109 の助成を受けた成果の一部である。史料や資料の閲覧では，台湾中央研究院地理資訊科学研究専題中心の廖泫銘老師，熊本県立大学学術情報メディアセンター図書館，公益社団法人糖業協会にお世話になった。記して謝意を表したい。

参考文献：

1）辻原万規彦：臺灣糖廠與社宅街變遷圖集，中央研究院人文社會科學研究中心地理資訊科學研究專題中心，2019. 9
2）辻原万規彦，青井哲人，恩田重直：台湾濁水溪北岸における製糖工場の建設と地域開発，建築学会大会学術講演梗概集，F-2，pp. 733～734，2020. 9
3）辻原，青井，恩田：台湾濁水溪南岸における製糖工場の建設と地域開発，建築学会九州支部研究報告，第 60 号･3，pp. 557～560，2021. 3
4）辻原：台湾蘭陽平野における日本統治時代の地域開発–交通インフラの整備と産業の立地による工業都市羅東の発展，空想から計画へ　近代都市に埋もれた夢の発掘（中川理ほか編），思文閣出版，pp. 659～688，2021. 3

＊ 熊本県立大学環境共生学部居住環境学専攻　教授・博士（工学）　＊ Prof., Prefectural University of Kumamoto, Dr. Eng.